

「大豆谷」は何と読みますか 豆の付いた地名考

食料経済分析研究会 西 東 秋 男

1. はじめに

地名の起源には地形、人名、植物名、動物名などがあるが、植物の中でも豆類は米と並んで太古からわたくし達の基本食料となり、食文化の形成に寄与してきた。このようなことから、豆への恩恵の念もあってか、豆の付いた地名も少なくない。

そこで、今回は豆及びその加工品の付いた地名をとりあげ、所在地、読み方、一部のものについては、地理、沿革、由来、名称使用などについてもふれてみたい。

豆の付いた地名の数は諸情報から推計すると、全国に244ヵ所あるとみられる。このうち、小豆、大豆及び伊豆の付いた地名が全体の約3分の2を占めている。また、地域別にみると、東日本、特に東北地方に多いのが目立つ。

2. 大豆の付いた地名

まず、いくつかの読み方がある大豆の付いた地名についてみると、51ヵ所で全体の2割を占めている。地域別にみると、東北地方が35ヵ所ときわだって多く、なかでも、福島県は16ヵ所を数えている。一方、中国、四国、九州など西日本は皆無である。この

理由については、種々あると思われるが、西日本は稲作に適していたことから、大豆栽培へ依存する度合いが少なかったことや東北地方では大字や小字が西日本に比べ多く残っていることなども要因としてあげられよう。歴史民俗学的にも興味ある課題である。

ところで、地名の場合、大豆の「大」を読まずに、「まめ」と読む地名が多数ある。これは古来、豆といえは、大豆を指していたからであろう。

(1) 大豆田という地名

大豆の付く地名のうち、最も多く、全国に13ヵ所あるが、このうち、東北地方が11ヵ所で大部分を占める。読み方は「まめだ」「おおまめた」「おおまめだ」「だいでん」の4通りで、「だいでだ」と読む所はないようだ。

①青森県上北郡横浜町大豆田（まめだ）

大豆田の地名のうち、最北にある。横浜町は下北半島の首の部分に当たり、陸奥湾に臨む。大豆田は町の北部の海岸付近に位置。かつては大豆の生産が行われていたのであろうか。現在、横浜町は日本一を誇る菜の花畑（約150ha）を有し、毎年5月に

は「菜の花フェスティバル」が開催されている。風が強いため大豆田風力発電所がある。隣接の字「家ノ前川目」に大豆田小学校（生徒数約50人）がある。

②石川県金沢市大豆田本町（まめだほんまち）

最も西にある大豆田の付いた地名。市の西部、金沢平野の犀川（さいがわ）下流に位置。江戸期～明治22年まで大豆田村。金沢市内には昭和41年まで大豆田新町（まめだしんまち、「おおまめだしんまち」ともいった）や大豆田町（まめだまち、「おおまめだまち」ともいった）という大豆田の付いた町名があったが、他の町へ編入された。

これに関連して、金沢市では旧町名復活運動が行われており、平成11年に全国で初めて旧町名、主計町（かずえまち）が復活した。同市ではこれを積極的に支援するため、平成16年には「金沢市旧町名復活の推進に関する条例」が制定された。

なお、同県能登半島先端にある珠洲市内に、現在、地名としては残っていないが、平安期に能登国珠洲郡五郷の一つに「大豆郷」があったと『和名抄』（937頃）に記されている。「まめのごう」と読むのか、「おおたりのごう」と読むのかは確定できないという。

ところで、「大豆」を「まめ」と読むと述べたが、「大豆田」の場合、以下の地名のように「おおまめだ（た）」と読む地名が多い。なお、「田」の読みは濁音が多いが、次の③、④は清音である。

③福島県会津若松市大戸町（おおとまち）上三寄（かみみより）大豆田（おおまめた）

県内には全国で最も多い6ヵ所の大豆田があるが、当地は市の南西部に位置し、大豆田村、上三寄村、大戸村が合併の順に地名が構成されている珍しい地名。阿賀川（大川）東岸の河岸段丘上を会津鉄道、国道121号線（日光街道）が通り、国道沿いに位置する。

この他、④須賀川市江花字大豆田（おおまめた）、⑤会津若松市北会津町下野（しもの）字大豆田（おおまめだ）、⑥喜多方市大豆田（おおまめだ）などがある。

⑦秋田県にかほ市象潟（きさかた）町字大豆田（おおまめだ）

県南西部の旧由利郡象潟町。平成17年10月、旧仁賀保町、旧金浦（このうら）町と合併し、にかほ市となる。象潟町は元禄2年（1689）芭蕉が訪れて「象潟や雨に西施（せいし）がねぶの花」の名句を残す。八十八潟九十九島の景観は文化1年（1804）の大地震で消滅。大豆田は町の中央部近くにある。また、県内には、「だいでん」と読む⑧秋田市上新城道川（かみしんじょうみちかわ）字大豆田がある。

以上のほか、東北地方には、⑨宮城県栗原市若柳武鎗（むやり）大豆田前（おおまめだまえ）。旧若柳町 ⑩山形県米沢市窪田町窪田大豆田（おおまめだ）がある。

⑪栃木県大田原市大豆田（おおまめだ）

関東地方で唯一の大豆田の地名。県北東部にある旧那須郡黒羽町大豆田。平成17年10月、旧湯津上（ゆづかみ）村とともに大

田原市に合併した。大豆田は旧町の西部、那珂川と湯坂川の合流地点付近の地味豊かな段丘上に位置する。江戸期～明治22年まで大豆田村。地名は五穀豊饒の地に由来するといわれる。

(2) 大豆沢という地名

5ヵ所。東北地方だけに見られる地名であり、読み方は、「だいずさわ」「おおまめざわ」「まめざわ」の3通り。同じ宮城県内でも読みが異なっている。

①青森県三戸郡三戸町貝守字大豆沢（だいずさわ）

②宮城県宮城郡七ヶ浜町吉田浜字大豆沢（だいずさわ）

③秋田県由利本荘市赤田字大豆沢（だいずさわ）

④岩手県大船渡市末崎町字大豆沢（おおまめざわ）

⑤宮城県仙台市青葉区大倉字大豆沢（まめざわ）

(3) 大豆谷という地名

3ヵ所。読み方は、「まめざく」「おおま

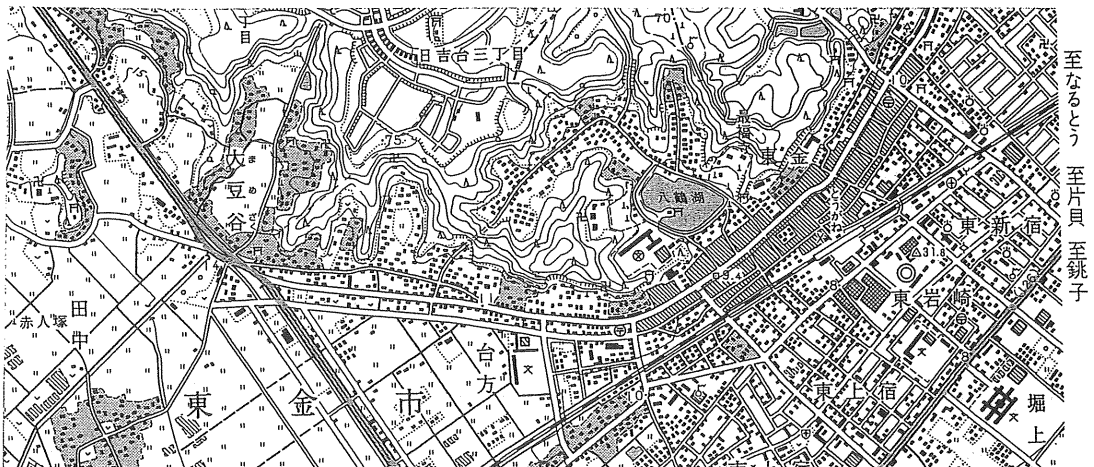
めだに」「まめがい」の3通り。

①千葉県東金市大豆谷（まめざく）

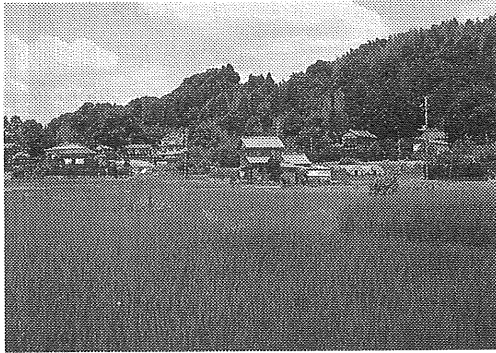
市の西部。下総台地東端と九十九里浜平野最深の接触部に位置し、台地の断層崖下に集落を形成。崖下を国道126号線が走る。現地に赴くと、台地と平野の状況が比較的良好に分かる。江戸期～明治22年まで大豆谷村。大豆作村とも書いた。作（サク）がザクに転訛したものとみられる。大豆谷の由来は不詳だが、谷田（ヤツダ、樹枝状谷）のよく発達した土地が、豆作に適していたのではないかとされる。当地方では谷のことを「ザク」ということもあって、「マメザク」になったとも考えられる。小字名に泉谷（いずみざく）がある。

明治初年には谷を「ザク」と読む千葉県前身の一つ「宮谷（みやざく）県」（県庁跡は県史跡）が大網白里町大網にあった。谷を「ザク」と読む地名には、香取市竜谷（りゅうざく、旧小見川町）、香取市桐谷（きりざく、旧山田町）などがある。

大豆谷には、江戸期の三大農学者の一人



国土地理院 2万5千分の1地形図「東金」（平成12年修正）



大豆谷の景観

といわれる佐藤信淵（1789～1850）の「家学大成之地」の碑がある。ここで、『経済要略』など多くの著述を行ったといわれる。大豆谷古墳群、大豆谷隧道がある。

②富山県南砺（なんと）市利賀（とが）村大豆谷（おおまめだに）

平成16年11月の市町村合併以前は、東砺波郡利賀村大豆谷。南砺市になっても、利賀村の名称が残っているのは極めて珍しい。これは、五箇山（ごかやま）の深雪山村の利賀村が「利賀そばの郷」として知られ、日本初のそば専門博物館「そばの館」があり、また加賀藩時代には煙硝（火薬の原料）を藩に納めるなど、由緒ある村であることなどから、利賀村の名称が残ったのであろう。大豆谷は旧村の中央部にあり、利賀川右岸の山地平坦部に位置する。

ところで、『角川日本地名大事典 富山県』によると、大豆谷は「おおまめだん」と読みがつけてある。また、大豆谷の北にある「北豆谷」も「きたまめだん」とある。地元では通常このように呼称しており、

「だん」は「たに」の方言の由。

③福島県南相馬市小高区神山字大豆谷（まめがい）

旧小高町。「谷」を「かい」と読む地名に、千葉県佐倉市生谷（おぶかい）がある。

(4) 大豆柿という地名

読み方は「おおまめがき」「おおまめかき」の2通り。

①宮城県刈田郡七ヶ宿町大豆柿道上（おおまめがきみちうえ）

②宮城県刈田郡七ヶ宿町大豆柿道下（おおまめがきみちした）

③福島市飯倉町茂庭大豆柿沢（おおまめがきさわ）

④福島市佐原（さばら）大豆柿下（おおまめかきした）

(5) 大豆柄という地名

福島県に3ヵ所あり、読み方は「まめがら」「だいずがら」の2通り。

①田村郡小野町大字飯豊字大豆柄（まめがら）

②南相馬市原町区高（たか）字大豆柄内（まめがらうち） 旧原町市。

③東白川郡棚倉町大字寺山字大豆柄（だいずがら）

(6) 大豆戸という地名 2ヵ所。

①埼玉県比企郡鳩山町大豆戸（まめど）

鳩山町は埼玉県中央部比企郡の町。大豆戸は町の南西部のなだらかな丘陵地帯にあり、すでに室町期に大豆戸郷と見える。江戸期～明治22年まで大豆戸村。気象衛星センターの気象衛星通信所がある。明治9年の戸数71、人口352、農産物は米・麦・大

豆・小豆・アワ・ソバなど。

②横浜市港北区大豆戸町（まめどちょう）

戦国期に大豆戸郷と見える。江戸期～明治22年まで大豆戸村。区役所、港北警察署などの所在地で、同区の中心地。大豆戸小学校がある。同地のほぼ中央部を東海道新幹線と環状2号線が通る。

(7) 大豆生田という地名

山梨県以外にはないと思われる。読み方は、「まみょうだ」と「おおまめおだ」の2通り。

①北杜（ほくと）市須玉（すたま「くすだま」ではない）町大豆生田（まみょうだ）

北杜市（県の北西部に位置し、く杜のまち）に由来）は平成16年11月北巨摩郡の7市町村が合併して新設され、18年3月小淵沢町を編入し、県下で最大の面積を有する市となった。大豆生田は釜無川の支流須玉川と塩川に挟まれた段丘上に位置する。平安期の集落址とされる大豆生田遺跡や戦国時代の大豆生田砦跡がある。江戸期～明治7年まで大豆生田村。現在、市役所の所在地。地内に中央自動車道須玉ICがある。地名は古代の田の等級である「豆田」に由来するといわれる。「まみょうだ」と読む地名は、極めて珍しい地名の一つである。

ところで、名字の場合には、この読み方はないようであるが、「おおまめうだ」「おおまみゅうだ」「おおまめおだ」「おおまめしょうだ」「まにゅうだ」「まめおだ」など多くの読み方がある。金田一春彦（1913～2004）によると、「おおまみゅうだ」は固

有の日本語で「みゅ」という発音が現われる唯一の単語だと『日本語の特質』（日本放送出版協会）の「日本語の発音」の中で指摘し、小学校のときに「ミヤ・ミュ・ミヨ」と発音の練習をしたのは、大豆生田さんの苗字を正しく読めるように稽古したのだと述べている。

②笛吹市石和町下平井大豆生田（おおまめおだ） 旧石和町。

(8) 上記以外で、大豆を「まめ」と読む地名

①岩手県盛岡市下米内（しもよない）大豆門（まめかど）旧下米内村大字大豆門。

②大阪府堺市大豆塚町（まめづかちょう）市の北部、西除川下流左岸段丘上にあり、戦国期から明治22年まで大豆塚村。

なお、現大阪市内には江戸期から明治5年まで大豆葉町（まめのはちょう）〔中央区高麗橋〕があった。

③奈良市大豆山町（まめやまちょう）

市の中央部に位置。東は大豆山突抜町に接する。大豆山は南北朝期から見える地名。地名の由来は、同町にある崇徳寺の山号花嘗山の嘗山（なめやま）と大豆山と語音が近いため誤って大豆山となったとも、かつて大豆山氏が居住していたことにちなむともいわれる。

④奈良市大豆山突抜町（まめやまつけぬけちょう）

江戸期から見える地名。江戸期には大豆山突抜裏之町（うらのちょう）があったが1町として独立せず、当町に属した。突抜町とは、街区の中または街路から分岐した

小街路に立地した町をいう。この呼称は特に近世になって形成されたものに多いという。なお、京都市内には突抜町の付いた町名が多数ある（上京区木下突抜町、下京区天使突抜1丁目、中京区姉小路通西洞院東入突抜町など）。

⑤奈良県桜井市大豆越（まめごし）

市の北西部。大和川本流（初瀬川）の中流右岸の東方に位置する。室町期には「豆越」と見える。江戸期～明治22年まで大豆越村。明治15年頃の農産物は米305石・もち米25石・麦45石・小麦15石・大豆2石余。税地は田14町余で、畑は4反余に過ぎない。

⑥奈良県東吉野村大豆生（まめお）

村の南部。吉野川水系高見川支流四郷（しごう）川流域に位置する。江戸期～明治22年まで大豆生村。地名の由来は、大豆の植生にちなむといわれる。

⑦長野市大豆島（まめじま）

千曲川と犀川合流点の北側に位置。戦国期に「まめしま」と見える。江戸期～昭和29年まで大豆島村。29年4月長野市に編入された。地名は両川に挟まれ河原を開き、大豆栽培を行ったことに由来するという。大豆島の名称は小学校や郵便局をはじめ多く使用されている。

⑧宮城県黒川郡大郷町味明（みあけ）字大豆坂（まめざか）

(9) 上記以外で、大豆を「おおまめ」と読む地名 5カ所。

①宮城県大崎市三本木字大豆坂（おおまめざか） 旧三本木町。

②宮城県伊具郡丸森町字大豆栗（おおま

めぐり） 同町には多くの字が残っている。

③宮城県伊具郡丸森町館矢間館山（たてやまたてやま）字大豆繰（おおまめぐり）

④福島市飯坂町茂庭大豆栗（おおまめぐり）

⑤福島県石川郡石川町大豆ケ平（おおまめがひら） 大豆ケ平の隣に「豆ケ平」がある。

(10) 上記以外で、大豆を「だいず」と読む地名 1カ所。

①新潟県上越市大豆（だいず）

市の中央部に位置し、古くは春日山城下町であった。地名の起源は、この地が水田に適さず、大豆畑になったからだといわれる。江戸期は大豆新田村、明治に入り明治22年まで大豆村。

3. 小豆の付いた地名

68カ所あり、全体の約3割を占めている。地域的にみると、東北地方が48カ所と極端に多く、福島県が18カ所となっている。大豆の場合と異なり、箇所数は少ないが、中国、四国、九州など西日本にも分布している。

(1) 小豆沢という地名

小豆の付いた地名のうち最も多く、20カ所にのぼる。読み方は「あずきさわ」「あずきざわ」「あずさわ」の3通り。最北は青森県。西日本にはないようである。

①青森県東津軽郡平内町小豆沢（あずきさわ）

平内町には小豆沢の付いた地名が9カ所

もある。同町は夏泊（なつどまり）半島を占める。小豆沢は半島の付け根のほぼ中央部、盛田川の上流部近くに位置し、南をJR東北本線が東西に走る。戦国期から見える地名。江戸期～明治22年まで小豆沢村。地内に西平内駅（1970年から無人駅）がある。同地付近に、②小豆沢字小豆沢、③小豆沢字狐森（きつねもり）、④小豆沢字小水ヶ沢（こみずがさわ）、⑤小豆沢字土井立（どいだて）、⑥小豆沢字茂浦沢（もうらさわ）、⑦小豆沢字水ヶ沢（みずがさわ）、⑧小豆沢字水ヶ沢山（みずがさわやま）がある。また、町の北西部に⑨茂浦小豆沢越（もうらあずきさわごえ）がある。文献によっては「あずきざわ」とあるが「あずきさわ」が正しい。

⑩秋田県鹿角市八幡平（はちまんたい）
字小豆沢（あずきさわ）

米代川と熊沢川の合流点の東側約1kmに位置し、国道282号線沿いにあり、JR花輪線八幡平駅がある。戦国期に小豆沢村と見える。江戸期～明治9年まで小豆沢村。八幡平には、このほか⑪字小豆沢掟（いかり）、⑫字小豆沢内川原（うちかわはら）、⑬字小豆沢上川原（うえかわはら）、⑭字小豆沢谷地（やち）がある。

⑮岐阜県飛騨市宮川町小豆沢（あずきざわ）

旧吉城郡宮川村。飛騨市は、平成16年2月飛騨4町村が合併し新設。小豆沢は岐阜県の最北端で、富山県に接する。地名の由来は沢地に小豆がよく生え出たことにちなむという。当地には活断層があり、安政の

飛騨地震では多くの場所が一変したといわれる。地形からみて、崖の崩壊説も考えられる。

⑯石川県金沢市小豆沢町（あずきざわちやう）

市の南東部の医王山麓に位置。市の教育・文化キゴ山ふれあいの里や市営医王山スキー場がある。キゴ山は標高546m。高地にあるところから、地名は崖の崩壊などに由来するのではないか。

⑰東京都板橋区小豆沢（あずさわ）1～4丁目

区の東端にあり、工場と住宅が混在。北部は新河岸川右岸の沖積地、南部は台地上に位置する。江戸期～明治22年まで小豆沢村。小豆沢の名称を使用したものには公園、体育館、神社などのほか、病院、スーパー、商店など多数あり、豆の付いた地名の中では、最も多いと思われる。地名の由来については諸説がある。貢物の小豆を積んだ平将門（?～940）の船が難破して、入江に小豆が流れ込んだとする説、飢饉の年に小豆の束が沢に流れ着き、村人を飢えから救ったという説、洪水で米が流れ着いたとき、村民は腐るのを恐れて小豆を入れて赤飯にして食べたという説、「アズ」とは崩れた崖のことだとする説など。

(2) 小豆田という地名

15ヵ所。読み方は「あずきだ」と「あずきた」の2通り。東北地方以外では愛知県のみ。

①宮城県遠田郡涌谷町小里字小豆田（あずきだ）

②宮城県大崎市岩出山上野目（かみのめ）

小豆田（あずきだ） 旧岩出山町。

③福島市桜本字小豆田（あずきだ）

④福島県南相馬市原町区米々沢（めめざわ）字小豆田（あずきだ） 旧原町市。

⑤愛知県犬山市羽黒字小豆田（あずきだ）

⑥秋田県大仙市長野字小豆田（あずきた）

⑦秋田県湯沢市小豆田（あずきた）

日本郵政公社は「あづきた」と記載。

(3) 小豆畑という地名

6ヵ所。読み方は「あずきはた」「あずきばた」「あずきばたけ」「あずはた」の4通り。西日本にはないようである。

①福島市大波字小豆畑（あずきはた）

市の東部に位置し、付近を国道115線が走る。

②宮城県大崎市鳴子温泉鬼首（おにこうべ）小豆畑（あずきばた） 旧鳴子町。

③愛知県豊田市花沢町小豆畑（あずきばた）

④京都府亀岡市旭町小豆畑（あずきばた）

⑤福島県相馬市山上字小豆畑（あずきばたけ）

市の西部に位置し、近くを宇多川に沿って国道115号線が通る。

⑥茨城県北茨城市華川町小豆畑（あずはた）

市のほぼ中央部の山地に位置。文禄4年（1595）の岩城領検地目録に「小豆畑村」と見える。江戸期～明治22年まで小豆畑村。かつて常磐南部炭田の開発とともに、地内

にも炭鉱が開られた。

(4) 小豆嶋（あずきしま）という地名

5ヵ所。いずれも、仙台市泉区内にある。実沢（さねざわ）字小豆嶋岩下、実沢字小豆嶋五百刈、実沢字小豆嶋下中、実沢字小豆嶋前、実沢字小豆嶋屋敷。

(5) 小豆島という地名

3ヵ所。読み方は「あずきしま」「あずしま」「しょうどしま」の3通り。

①宮城県名取市愛島（めでしま）小豆島（あずきしま）

昭和30年愛島村、増田町など2町4村が合併し名取町設置。新町誕生の際の合併条件として、新町の次に旧村名の小豆島をつける。33年市制施行。

②和歌山市小豆島（あずしま）

紀ノ川河口にある面積約13haの楕円形の中州と紀ノ川北岸の氾濫原からなる。地名は『続風土記』によると、小豆は借字で崩岸の意とあり、紀ノ川の変動によって中州が陸地に接続したことに由来するという。江戸期～明治22年まで小豆島村。紀伊郵便局や紀伊小学校小豆島分校がある。

③香川県小豆（しょうず）郡小豆島（しょうどしま）町

平成18年3月、瀬戸内海の小豆島内にある内海（うちのみ）町と池田町が合併新設。旧内海町は醤油醸造業、池田町は日本初のオリーブ導入の地として知られる。小豆島は『古事記』に「アズキシマ」、『応神紀』に「あはぢしま、いやふたならび、阿豆枳辞摩、……」とある。小豆（アズキ）を音読してショウドと訓読したという。小豆島

の由来は小豆の生産地とする説が有力だが、崩壊地説や漁業と関係のあるアジキ（網敷）の転訛説もある。

(6) 上記のほか、小豆を「あずき」と読む地名

- ①岩手県一関市東山町長坂小豆用（あずきよう） 旧東山町。
- ②宮城県柴田郡柴田町入間田字小豆岡
- ③秋田県大仙市長野字小豆瀬（あずきせ）
- ④福島県伊達郡飯野町明治字小豆洗（あずきあらい）
- ⑤福島県安達郡大玉村玉井（たまのい）小豆坊（あずきぼう）
- ⑥福島県二本松市初森字小豆房（あずきぼう）
- ⑦福島県岩瀬郡天栄村上松本小豆平（あずきだいら）
- ⑧福島県双葉郡双葉町山田小豆迫（あずきさく）
- ⑨新潟県長岡市寺泊小豆曾根（あずきぞね）

旧寺泊町。信濃川分水路の落口の平野部に位置。江戸期～明治22年まで小豆曾根村。

⑩愛知県岡崎市羽根町字小豆坂（あずきざか）。⑪同市美合（みあい）町字小豆坂、この周辺は戦国時代に「小豆坂の戦い」が繰り広げられた所。同市戸崎町に小豆坂小学校がある。

- ⑫愛知県豊田市時瀬町（ときぜちょう）小豆蔵連（あずきぞうれん）
- ⑬京都市伏見区小豆屋町（あずきやちよう）

江戸期～明治22年まで小豆屋町。地名は

江戸期に小豆を取り扱う商人がいたことにちなむ。小豆の輸送には町の東から南へ曲折して流れる濠川を利用したのであろう。濠川は豊臣秀吉が伏見城を築いた際の外濠にあたり、淀川に通じる。

- ⑭京都府相良郡精華町北稻八間（きたいなやづま）小豆尾
- ⑮島根県大田市三瓶町多根小豆原（あずきはら）
- ⑯山口県光市三輪字小豆尻（あずきじり）
- ⑰長崎県諫早市小豆崎町（あずきざきまち）

江戸期～明治9年まで小豆崎村。地名の由来は源為朝が引き絞って放った矢が岬で力尽きて落ちたので、矢尽き崎といい、後に転訛して「あずきざき」となったという。

- ⑱宮崎県西都市上三財（かみさんざい）小豆野など

ところで、小豆谷という地名はないようである。かつて長崎県佐世保市重尾免字小豆谷があったが、昭和33年に免及び字が廃止され、現在は重尾町となっている。

4. 大豆、小豆以外で豆の付いた主な地名。いくつ読めますか。

- ①宮城県栗原市志波姫伊豆野（いずや）栗原市は平成17年志波姫町など10町村合併し新設。
- ②秋田県横手市前郷字豆干台（まめほしだい）
- ③山形県東置賜郡川西町高豆蔻（こうずく）

伝統野菜「高豆蔻瓜」の産地。普通の瓜

と異なり、俵型で肉厚の瓜で漬物に利用される。

④山形県飽海郡遊佐町吹浦字由豆佐山（ゆずさやま）

⑤福島県白河市久田野豆柄久保（まめがらくぼ）

⑥福島県白河市本沼（もとぬま）豆粉坂（まめこさか）

⑦福島県南会津郡南会津町静川字豆渡（まめわたり）旧田島町。

⑧福島県石川郡石川町豆ヶ平（まめがひら）

⑨茨城県つくば市大角豆（ささぎ）旧桜村。地名は、かつて畑作地帯であったこの一帯で大角豆（ささげ）が多く栽培されていたことに由来するのであろうか。難読地名として知られる。地内に縄文・弥生時代の大角豆遺跡、縄文時代の下大角豆遺跡がある。大角豆の付いた地名に次の2つがある。

⑩愛知県豊田市加納町大角豆洞（ささぎぼら）

⑪愛知県額田郡幸田町大字深溝（ふこうず）字大角豆田（ささぎだ）

⑫神奈川県横浜市中区豆口台（まめぐちだい）

区の中央部。根岸台地に位置。豆口の「マメ」は崖地を指すともいわれる。

⑬石川県輪島市打越町豆木（まめぎ）

⑭三重県多気郡大台町明豆（みょうず）

⑮三重県多気郡大台町久豆（くず）

⑯京都市右京区西京極豆田町（にしきょうごくまめだちょう）

⑰京都市西京区桂上豆田町（かつらうえまめだちょう）

⑱京都市伏見区淀美豆町（よどみずちょう）美豆小学校がある。

⑲兵庫県三田市波豆川（はずかわ）同名の河川がある。

⑳兵庫県赤穂郡上郡町小野豆（おのず）

㉑長崎県対馬市厳原町豆酸（つつ）豆酸小、中学校がある。

対馬市は平成16年3月厳原町など6町合併し新設。平安期に豆酸郷と見える。

このほか、町内には㉒豆酸内院（つつないん）、㉓豆酸瀬（つつせ）がある。

漢和辞典によると、酸（とう）は酒を二度発酵させること、またその酒のこととある。

㉔鹿児島県薩摩郡さつま町広瀬豆漬（まめづけ）旧薩摩町。

㉕沖縄市国頭郡本部町伊豆味（いずみ）

5. 豆加工品の付いた地名

①福島市佐倉下（さくらしも）字納豆

②福島県郡山市逢瀬町河内（こうず）字上納豆内（かみなっとうち）

③福島県郡山市逢瀬町河内字下納豆内

④京都市相楽和束町（わづかちょう）別所小字納豆

⑤静岡県浜松市小豆餅（あずきもち）1～4丁目

昭和51年住居表示実施により新設。住宅地帯で東西南北に整然と整備されている。地名の由来は、徳川家康が三方が原の戦いで武田信玄に敗れ、逃走中、この地で小豆

餅を食べたという言い伝えにちなむ。かつて軽便鉄道が通っており、小豆餅駅があった。

⑥京都市中京区饅頭屋町（まんじゅうやちょう）

わが国で初めて饅頭を創案したといわれる林淨因（りん・じょういん）の子孫がこの地で饅頭屋（塩瀬家）を構えたことにちなむ。

⑦兵庫県姫路市豆腐町（とうふまち）

市中央部。北は西駅前町、南はJR姫路駅構内。

⑧奈良市大和郡山市豆腐町（とうふまち）
戦国期から見える地名。

⑨福島県西白河郡泉崎村北平山醤油実（しょうゆのみ）

⑩宮城県石巻市皿貝字味噌作（みそさく）
味噌の付く地名は全国に20カ所ある。

⑪新潟県佐渡市相川味噌屋町（みそやまち）

慶長年間頃に味噌屋が軒を連ねていたという。

⑫愛知県一宮市萩原町高木字味噌屋

⑬京都府相楽郡精華町祝園（ほうその）
小字味噌柿（みそがき）

6. 地名は貴重な無形の文化遺産

明治22年の市制・町村制の施行（明治の大合併）、昭和28年市町村合併法の施行（昭和の大合併）、昭和42年の住居表示法の施行などで、歴史のある地名が少なからず消滅した。豆の付いた地名も例外ではなかった。今回の平成の大合併においても、無形の文化財ともいえるべき地名が消滅したり、歴史や伝統を無視した「ひらがな地名」が出現するなど、問題も少なくない。これを機に、地名への関心が高まり、地域の再評価の手がかりが得られれば、幸いである。

今回の執筆に当たっては下記の参考文献のほか、地名事典やインターネットなど多くの情報を渉猟しました。また、文献等により読みが異なる地名については、該当市町村などにお問い合わせをし、回答を得ました。深く感謝の意を表する次第です。

主な参考文献

『角川日本地名大辞典 各編』同編集委員会編 角川書店 昭和54～平成3

『難読・異読地名辞典』楠原佑助編 東京堂出版 平成11

『地図で知る 平成の市町村大合併』国際地学協会 平成17